

1 3 . サルの生息域コントロール試験

(2) 発振器装着個体の利用について

遠竹行俊

〔目的〕

サルをできるだけ傷つけずに農作物被害を防ぐためには、サルの生息環境を解明し、群れの移動をコントロールすることが必要である。

そこで、捕獲されたサルに発振器をつけて群れの動きを観察し、群れを一定地域に誘導したり、群れの接近を予測し、集落や農地から追い払うために発振器装着個体の利用を試験する。

〔方法〕

捕獲は、八王子市とあきる野市で実施し、検体は、昨年捕獲した3頭を含む合計7頭を用いた。捕獲方法は、ワイヤー式トラップを用いた。発振器は、手芸用の化繊ベルト（厚み2mm×幅2.5mm）にエポキシ樹脂と細いステンレス線で固定した。化繊ベルトは、サルの首に二重にして、絹糸で縫い付け、頭骨から抜けない程度の緩さにした。ベルトの固定に絹糸を使用したのは一定期間後に動物性繊維が劣化して、ベルトが落ちるためである。発振器のアンテナは、地面や植物に触ると受振感度が落ちることがあるために、高周波ワニス塗り二重になった化繊ベルトの間に挟み込んだ。

〔結果〕

7頭の発振器装着個体の内、No.6 オナリスとNo.7 オナリスは、'96年8月に、同じ集落で各1頭捕獲された。2頭とも群れを構成する成雌であった。捕獲時に所属していた群れの規模は、No.6は、約40頭、また、No.7は、約20頭をであった。ところが10月下旬には、捕獲地点の北西約500mに2頭同時に、12月には、南西約5kmの、群れが通年利用している地域外と考えられる八王子市に2頭同時に観察された（表-1、図-1）。このことは、群れが離合集散を繰り返し、広い地域を利用していることを示している。

その他の個体・No.1、2、4、5は、電池切れや駆除のため追跡できなくなった。残るNo.3 オナリスは、追跡当初と同様の広範囲移動を繰り返している。

以上のことから、群れの集落への接近予測や群れを誘導する試みの前に、多くの生態情報を把握する必要があると考えたが、十分な情報を得ることができなかった。

このことは、十分な追跡が行えなかったことに加えて、発振器の電池寿命が充分でなかったことや、試験初期のために、捕獲に多くの時間をさいたわりに試験個体は短期間に多く事故死してしまったこと等多くの課題を確認した。

この試験では、捕獲、発振器装着、追跡をできるだけ地域の受益者に周知して、作業を共同作業で行う必要性を痛感した。

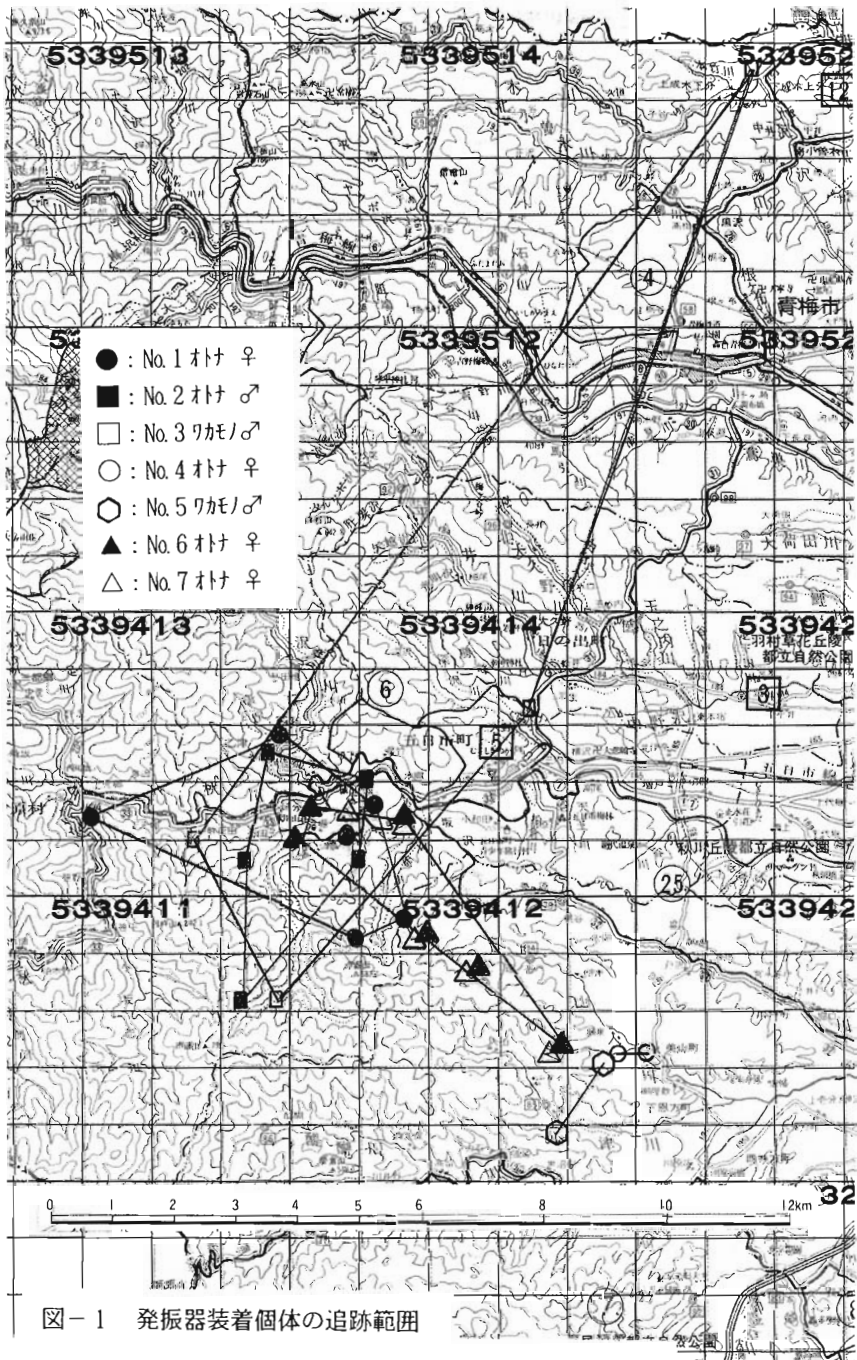


図-1 発振器装着個体の追跡範囲

表-1 発振器装着個体

No.	令	性別	捕獲日時	捕獲地名	頭数	備 考
1	柺	♀	95. 9. 24.	あきる野市	1	96. 5. 31. 捕獲地点の北数百m地点まで追跡
2	柺	♂	95. 10. 5.	〃	1	96. 12. 28. 捕獲地点近傍で電池切れ
3	カモノ	♂	95. 11. 8.	〃	1	96. 12. 28. 広域をランダム移動中
4	柺	♀	96. 5. 24.	八王子市	1	96. 11. 東方約500m地点まで追跡
5	カモノ	♂	96. 5. 24.	〃	1	96. 11. 南方約1.5km地点まで追跡
6	柺	♀	96. 8. 17.	あきる野市	1	97. 2. あきる野市～八王子市を移動中
7	柺	♀	96. 8. 19.	〃	1	同上